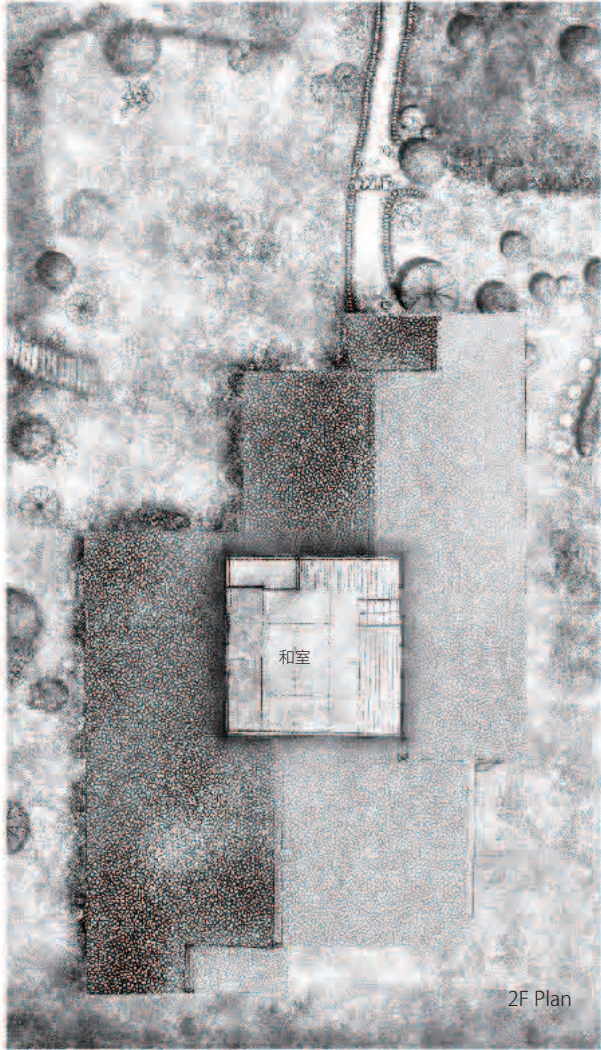




ある家とある家族



ある家の物語



1

田舎のとある農村の一角にたつ、1軒の茅葺屋根の家。この家にはここに代々住み続ける家族の姿があった。惣助、惣吉、そして曾祖父である惣次で3代目。暮らし継がれていく家。

2

祖父が小学生のころ、曾祖父が家をたてかえた。貯金を切り崩し、もともとあった茅葺屋根の家は“今風”の家になった。家族7人、助け合いながらの生活。

3

高校を卒業した祖父はこの家の生業であった農業を継がずに上京した。長男として、この家の跡継ぎとして、頼りにされていた祖父。家に残された両親と幼い兄弟たち。跡継ぎが揺らぐ家。

4

祖父と祖母の結婚式。この時はかりは家に帰った。家の続き間がハレの舞台にかわる。お互いの家族に見守られるなか、新たな家族が生まれ、新たな生活が紡がれていく。

5

やがて母と叔父が生まれた。転勤族の祖父に合わせて転々としていた住まい。あちこち生活拠点の家が変わるなか、この家は唯一変わらない居場所であった。夏休みには帰省してくる親戚たちでにぎわう。

6

曾祖父が亡くなった。兄弟も6人とも独立し、大きい家には曾祖母1人だけ。それでも母と叔父はここに毎年かさず遊びに来ていた。絶えることのないこの家と曾祖母への愛着。



7

祖父が家に帰ってきた。曾祖母1人を田舎に残しておくわけにはいかなかった。これを機に、今までの古い家から新たな家へ。世代と共に家も変わる。曾祖母と祖父母、3人の新たな生活。

8

暮らし継がれていく家で育った私。もの心ついたころから、ここが私の原風景となっていた。やがて弟・従姉弟が生まれ、かつて母や叔父が幼かったころのような夏のにぎわいがこの家にも生まれた。

9

認知症を患って曾祖母が施設に入った。この家にはもう帰ってこない。いなくなったあとも曾祖母と一緒に過ごした記憶が家には残っていた。寂しげに静まりかえる曾祖母の部屋。

10

2人で助け合いながら暮らす祖父母。同年代に比べれば元気なほうだが、昔に比べたら確実に体力が落ちてきている。いつまで元気でいてくれるだろうか。

11

両親との残された時間を一緒に過ごしたいと考えている母は、2人が元気なうちにこの家に帰って生活することを夢みる。看護関係の職ならば地方でも働き口はあるだろう。子供たち2人の独立後、田舎暮らしの計画をたてる。

12

祖父のあとこの家を継ぐ叔父。慣れ親しんだこの場所で余生を送る。子供たちが定年する頃の自分の年齢を考えると、この家で暮らすのは自分の代で最後になるかもしれない。この場所での記憶を後世に残すすべはないだろうか。



問題提起

ある家の家族構成と生活状況。その後の住人想定の中で、人が住み分けられる空き家となるのはまさに一筋縄でもあった。人口が減り、空き家になる住宅が増えていく地域において、住みこなされた住宅の死と、その後のあり方を考えていく必要があるのではないかな。

■ 提案

住みこなしの家を型枠にしてコンクリートを流し込み、家の型をつくる。
居住空間は生活の痕跡として彫刻となり、真逆の環境やそこでの空間体験など、住人不在のその後も現象として残る部分はそれに対応するように空間を穿つ。
型を穿ちながら、先祖の生活の痕跡とその環境での現象を体験跡として共有し、人と場所を繋げる新たな「家」の家を提案する。

1
2
3

Three architectural drawings of house plans, labeled 1, 2, and 3. Drawing 1 shows a plan with a central hall and several rooms. Drawing 2 shows a similar plan but with different room divisions. Drawing 3 shows a plan with a more complex layout, including a large open area and a smaller room.

生活の痕跡が残る家

両面を補強しながら、家を2種としてコンクリートを流す

生活空間としての機能を使い、半永久的に残り続ける家の基

idea3_家の基の地鎮祭

使い終わると型枠は家の骨見として部分的に家筋に引き取られ、その家の骨筋は別の場所でも生かされる。

記憶を呼び起こす日
 柱や壁にのみ込めた俺は生活の痕跡として記憶され、この場所で過ごした屋となる。人が
 笑みめくと同じように、建屋にいつか定着する。家において、それは住人がい
 なくなった時である。過去に戻りたくても戻れない。その痕跡となった部屋に入りたくて

も入れない。藤村でそんなものかしと切ななでかかれていたと。都下で寒く風や雨降の上からさす雨。そして家の裏に流れる川の音にかつての生活の記憶を思い起こさせられる。居住のための家が見えなくてもよい。その場所には生活と密着に関係していた環境との対話が残されていた。この家を含む環境という大きな箱の中で私は育ち、この場所こそが私の「家」であった。

■ 州省 一家の墓参りー

家の歴史は、親戚が集まる空間の代

Figure 1

100

100

100

